

## 尊氏兄弟と寺社

### ——室町幕府開創期の二元政治をめぐる

今 谷 明

#### はじめに

征夷大將軍である尊氏と、その弟ではあるが幕府官制上何の肩書も持っていない直義との間で、政務が二分され、二元政治・両頭政治の名で呼ばれていることは周知のところである。すなわち田中義成が、両者共御教書・下知状等の文書を発給しており、「其様式を見るに全く同一にして毫も相違の点なし。故に」「政令二途に出でし事明か」と指摘した<sup>(1)</sup>のを受けて、佐藤進一氏は「もしも、いわゆる如くに幕政が尊氏・直義の二頭政治であつて、権力の分裂でないならば、尊氏・直義との間には何らかの政治権限の区分調整があつたはず」と自問し、この権限区分を糾明するため、「両人の権限を正確に表現する文書」つまり下文・下知状を分析した結果、

尊氏の発給文書が守護職の補任状と新恩の宛行状に限られ（中略）直義発給文書を内容別に整理すると、安堵・

## 過所・禁制・裁許の四種に大別され

るということを明らかにされた<sup>(2)</sup>。このことから、有名な佐藤氏の、主從制的支配権・統治権的支配権というテーゼが生まれたのであるが、この佐藤理論に関しては汗牛充棟もただならぬ議論が出されており、ここに筆者がつけ加えようとする点はない。むしろ筆者の関心は、羽下徳彦氏が検討された両者の御教書系統の文書にある。羽下氏は南北朝初期の両者による軍勢催促状・感状の分析から、

建武三年後半から同四年前半のある時点で、軍勢の総指揮権が直義に与えられ、直義が実質的に尊氏的全権限を代行するに至った

と結論された。このことから敷衍して、さらに羽下氏は

尊氏と直義との制度的な支配権分割にも拘わらず、実質的には直義が幕政の中枢を占めた（中略）。建武三年後半から（中略）擾乱に至るまでは、尊氏は恩賞給付の最終的承認権を握る他、殆どどの事柄については直義の裁量に委ねていたのである。

とされ、佐藤説の如き「制度の原則」を超えて、「現実政治の面では、直義が殆んど尊氏的全権限を代行した」と、『梅松論』にいう尊氏隠居説を裏付ける主張を行われた<sup>(3)</sup>。このように、羽下説の力点は、佐藤氏が論証した「制度の原則」を、現実の直義が超越して全権限を代行したのではないかというにあるが、確かに軍事指揮・戦功認定という軍事面に限ってはそう言えても、他のすべての行政面にそれが言えるか否かは、同様の論証を行う必要があると思われる。そこで本稿では、羽下氏の驥尾に付して、同じ御教書系統の発給文書のうち、寺社に対して出された文書群を対象に、右の点、即ち直義が尊氏の「全権限を代行」したと言えるのかどうか、ささやかな考察を

試みたいと思うのである。

## 一、尊氏発給文書

### (1) 元弘没収地返還令

尊氏が寺社に出した文書のうち、比較的初期にのみ見出される文書に「元弘没収地返還令<sup>(5)</sup>」とても称すべき直状がある。この文書は武家・寺社双方に出されているが、寺社に宛てられた初見は

此所、元弘三年以来被収公云々、任相伝文書、如元可令知行、若構不実者、可処其咎之状如件

建武三年三月廿九日<sup>(6)</sup>

というもので、文中に「元弘三年以来」または「元弘以来」の句が調われ、後醍醐天皇によつて收公された没収地の返還を指示したものである。武家への返還令は、これより少し早く、二月七日の小早川祐景宛<sup>(7)</sup>を初見とし、次の

元弘以来、自公家被収公<sup>(後醍醐天皇)</sup>摂津右近大夫将監親秀本領事、知行不可有相違之状如件

建武三年六月廿九日<sup>(8)</sup>

のように、幕府吏僚に対して発給されたものも見出されるが、武士宛の五通はすべて六月末迄のものに限られ、七月以後は寺社に出されたものしか現存していない。ともあれ、建武三年十月以降発給の返還令は次のように書式が統一されてくる。

元弘以来被収公当寺領、并当知行地事、如元不可有相違之状如件

建武三年十月廿日

(尊氏  
花押)

桂宮院長老<sup>(9)</sup>

ではこの返還令の発給期間はどの位に亘っているか。管見の範囲で列举してみると次のようである。

建武三二・七 小早川祐景

〔小早川什書〕

2・7 院林了法

〔三宝院文書〕

2・8 大友寂応

〔郡文書〕

2・8 八木秀清

〔士林証文〕

3・29 武雄社

〔武雄神社文書〕

6・29 撰津親秀

〔士林証文〕

7・18 祇園社

〔八坂神社文書〕

7・18 南禅寺

〔南禅寺文書〕

7・18 高野山安養院

〔浅草文庫本古文書〕

8・19 高野山金剛三昧院

〔金剛三昧院文書〕

9・15 円覚寺

〔相州文書〕

9・16 高城寺

〔高城寺文書〕

9・17 南禅寺

〔南禅寺文書〕

9・28 永光寺

能登

10・7 妙興寺

尾張

10・14 蓮城寺

豊後

10・20 桂宮院

10・28 興昌寺

紀伊

12・5 大原野社

12・17 高野山伝宝院

〔三宝院文書〕

〔大原野神社文書〕

〔歡喜寺文書〕

〔広隆寺文書〕

〔大友文書〕

〔妙興寺文書〕

〔永光寺文書〕

このように、返還令は二月七日の小早川氏（寺社宛は三月末の武雄社）に発給されたのを初見とし、同年十二月十七日を最後に、以降は見られなくなる<sup>(10)</sup>。残存の全二十通中、初期の武士宛五通を除き、すべて寺社領に関するものである。さらに、最も重要と思われる点は、この文書の発給にかんし、直義は全く関与していないということである。この事実から、我々は次のような推測が可能であろうと思われる。

すなわち、建武三年二月の多々良浜合戦、同五月の湊川合戦によって、尊氏・直義の兄弟政権は、後醍醐天皇や新田義貞・楠正成らで構成される建武政府側から杉大納言所地（没収地）を獲得したが（今かりにその欠所地を「建武没収地」と呼んでおく）、その配分権は尊氏が一手に掌握していたのではないか、ということである。

さてこの建武没収地の寺社への返還は、尊氏兄弟が各寺社に戦勝祈願を行ったさい、報賽として神仏に誓約していたことでもあった。湊川合戦が終り、尊氏が京都を占領した直後の建武三年六月、直義が日吉社に捧げた願文に

敬白 立願事条々

右叡山惣持禪院（中略）然間左兵衛督尊氏依被詔命、為總大將所令誅伐義貞并党類也、今戰為得勝利者、当山代々御寄附、諸權門領、寄事於国領令押領之所々、任理可被付之也、（中略）併仰叡山之擁護也、仍立願如件

建武三年六月 日

源朝臣直義<sup>(1)</sup>

とあり、戦勝の暁には寺社参戦の報酬として返付の契約が調われている。元弘收公地返還令は、このように尊氏兄弟が神仏・寺社の戦争参加を要請するに際しての約束を履行するために行われた措置と解されるのである。

(2) 寄進状

権力や政治構造の究明に寄進状を扱うことは奇異に感じられる向きがあるかも知れない。なるほど、如何に最高権力者の発給文書とはいえ、寄進状とは元来、個人の信仰上の、宗教上の理由から神仏に土地・財貨を寄付する行為に伴う、純然たる私文書の系統のものである<sup>(12)</sup>。俗人相互の間で交付される売券・譲状が、個人と神仏の間で交付されるのが寄進状であるといえよう。しかしながら、室町幕府成立以降（厳密に言えば尊氏が入京する建武三年六月以降）、尊氏の名によつて大量に寺社に交付された寄進状なるものの性格を考えると、単なる尊氏私人の宗教（信仰）上の行為に伴うものとは到底考えがたい。それは、前節でも触れたように、尊氏の政権が獲得した膨大な建武没収地の、寺社への配分行為と解すべきものと考えられるのである。

例えば、御家人・武士に対して尊氏兄弟は軍勢催促状の発給によつて戦闘参加を要求し、その見返りが感状による戦功認定を経た上での新恩宛行であつたことを考えると、寺社への土地寄進は、やはり戦勝祈祷依頼や寺社大衆への軍勢催促<sup>(13)</sup>の見返りの意味（いわゆる報賽）をもつことは明らかであろう。従つて武士への新恩宛行と、寺社へ

の新たな土地の寄進は、どちらも俗人・神仏への戦闘参加の報酬として対応していることになる。しかもそれは、尊氏という私人でなく、最高権力者尊氏による公的、国家的な「封土」の分割、配分行為と見做されることになる。そこで尊氏による建武没収地の寺社への配分行為を、新恩宛行に対応する意味で以下「新寄進」と呼ぶこととした。以上が、本来私文書である尊氏の寄進状を、公文書に準じて扱う理由である。

次に、寄進状の実例を掲げ、その様式を確認しておきたい。まず、尊氏入京後の寄進状の初見とみられるのは、次の文書である。

寄附 東寺

河内国新開庄正成跡事

右為天下泰平・家門繁栄、所寄附之状如件

建武三年六月十五日

(尊氏)  
源朝臣(花押<sup>(14)</sup>)

この寄進状は、「天下泰平家門繁栄」とその寄進目的を国家的性格のものと明示して調っているため<sup>(15)</sup>、尊氏の寄進行為の公的性格をみやすくしているが、他の寄進状の多くは、このようには明示していない。例えば

奉寄

東大寺鎮守八幡宮

周防国大前村地頭職事

右為当社領、守先例可被致沙汰、者奉寄之状如件

建武三年十二月廿二日

(尊氏)  
源朝臣「御判」  
(16)

のような様式である。建武三年中に発給された尊氏寄進状を次に示すと

建武三・五・一

安芸  
造果保

〔厳島文書〕

六・一五

河内  
新開庄

〔東寺文書五常〕

七・一

山城  
久世上下庄地頭職

〔東寺百合文書〕

八・一八

丹波  
船井庄

〔北野古文書〕

八・三〇

加賀  
大野庄地頭職

〔天竜寺文書〕

一二・五

遠江  
初倉庄

〔南禅寺文書〕

一二・二二

周防  
大前村

〔東大寺藏書文〕

このように、建武三年中は寄進状は極めて少ない。幕府としては、寺社に対しさきの「元弘没収地」の返還を主体とし、それに当知行地安堵を保障する政策を重点としたものと推測される。しかるに翌建武四年（二三三七）に入ると事情は一変する。「元弘没収地返還令」の様式での寺社領配分はみられなくなり、専ら尊氏の寄進状によつて配分が行われるようになる。建武四年以降の尊氏寄進状を以下に列挙する。

建武四・二・晦

近江  
山賀庄・  
伊勢  
丹生庄・  
尾張  
枳頭子庄

〔園城寺文書〕



二・4・15	下野 中山村	〔鏝阿寺文書〕
9・16	播磨 印南庄地頭職	〔法觀寺文書〕
閏7・4	丹後 吉富新庄内刑部郷	〔前田家所藏文書〕
曆応元・5・3	丹後 佐野別宮地頭職	〔菊大路文書〕
12・22	遠江 羽鳥庄	〔秋鹿文書〕
11・21	洛中 錦小路大宮四町々敷地	〔山城名勝志〕
11・17	但馬 新井・黒河地頭職	〔新善光寺文書〕
7・25	摂津 善源寺東方地頭職	〔多田院文書〕
7・16	山城 桂新免	〔広隆寺文書〕
6・5	伊予 吉田郷・井於別名	〔菊大路文書〕
5・19	若狹 太良保	〔東寺百合文書〕
5・6	因幡 古海郷	〔東福寺文書〕
4・28	加賀 大野庄	〔臨川寺重書案〕
3・29	和泉 信達庄	〔報恩院文書〕

4・23	周防 下得地保	〔東福寺文書〕
6・28	出雲 淀新庄地頭職	〔二尊院文書〕
7・16	伊豆 蒲原御厨内多牛村	〔三島神社文書〕
7・16	伊豆 白浜村地頭職	〔三宝院文書〕
12・17	丹波 志和賀村地頭職	〔新善光寺文書〕
3・4・21	備後 三谷西条地頭職	〔天竜寺造営記録〕
6・15	日向 阿波 国富庄・那賀野山庄地頭職	〔天竜寺造営記録〕
7・16	山城 物集女庄	〔天竜寺造営記録〕
4・10・4	丹後 志楽庄地頭職	〔西大寺文書〕
11・29	土佐 大高坂郷・永武一色地頭職	〔最御崎寺文書〕
12・20	筑前 嘉麻郡内下山田・土師庄	〔相良文書〕
康永元・9・2	豊前 天目・赤坂別符以下地頭職	〔太宰管内志〕
3・11・3	山城 中村地頭職	〔大通寺文書〕
11・16	佐渡 青木以下六保地頭職	〔園城寺文書〕

四・四・六

淡路  
由良庄地頭職

〔熊野若王子文書〕

四・六

淡路  
由良庄内田地耆町

〔熊野若王子文書〕

貞和元・一二・三

備後  
横田村地頭職

〔浄土寺文書〕

二・一一・二

長門  
富安名

〔忌宮神社文書〕

一二・二八

丹波  
春日部庄内中山村

〔安国寺文書〕

三・正・一一

信濃  
浦野庄

〔相州文書〕

七・一一

近江  
下笠郷・田上郷金浦地頭職

〔桂林集〕

九・三

摂津  
棕橋庄内長島

〔勝尾寺文書〕

一一・一一

周防  
高尾郷

〔法観寺文書〕

四・八・二六

安芸  
己斐村

〔嚴島文書〕

五・正・一一

越中  
高木村

〔八坂神社文書〕

閏六・二

周防  
下得地保・古海郷

〔東福寺文書〕

このように、尊氏の寄進寺社は顕密・五山等宗派を問わず、また寺社・荘園の所在地とも地域を問わず全国に亘っていることが知られる。要するに尊氏は、寺社への建武没収地新寄進に関する広汎な権限を保持し、行使していた

ことがわかる。これに対して直義の寄進状は如何であろうか。管見の範囲では明確に寄進者が直義と判明する寄進状は次の二点である。

A、寄進 高野山金剛三昧院内大日堂

河内国岸和田庄事

右彼堂并本尊者（中略）先妣贈二品菩薩戒尼遺骨（中略）因奉寄之状如件

貞和二年卯月廿三日 （直義） 從三位源朝臣<sup>(17)</sup>

B、寄進 伊豆国円成寺

同国北条五箇郷（中略）事

右円成寺者（中略）寄進之儀、旨趣如件

暦応二年四月五日 左兵衛督朝臣<sup>(18)</sup>

まずAは、「先妣贈二品菩薩戒尼」とある如く、直義生母上杉氏の遺骨を本尊胎内に収めんための寄進であり、足利氏兄弟の私的な寄進行為と見做されるものである。恐らく尊氏の依頼によつて直義がこの措置をとつたものと推測される。よつて公的寄進としてはB例だけであるが、伊豆円成寺への同国北条郷の寄進を、何故尊氏でなく直義が行つたのかは明らかでない。筆者には今のところ解釈し難く、博雅の示教にまちたい。他に尊氏か直義か寄進者が判明しない寄進状案が数点あるが、ひとまずこれは除外して考えたい。

以上、わずかに一点、直義の寄進例という例外が存在するが、建武四年以降、観応擾乱勃発直前まで、寺社領の新寄進に関しては基本的に尊氏の権限に属し、直義は関与しなかつたとみられる。それは建武三年以前に遡つても

確認される事実であり、兄弟の鎌倉に於る挙兵以来、元弘没収地返還を含め、寺社への欠所地配分は尊氏の専管事項であつたと結論されるのである。

### (3) 祈祷御教書

社寺に対して戦勝祈願等の目的で祈祷を依頼・要請する文書を何と呼ぶべきか、富田正弘氏の指摘に従い、かりに「祈祷御教書」<sup>(19)</sup>と称しておく。尊氏は、後醍醐天皇の建武政府から謀叛と認定され（すなち挙兵し）た直後から、この御教書を発給している。その様式は初期の例では、

A、祈祷事、殊可被致精誠之状如件

建武二年十二月廿五日

（尊氏）  
（花押）

（宛所欠）<sup>(20)</sup>

のように簡略な章句にとどめるものから、次の、

B、祈祷事、今度之義兵、早速遂本意、將亦天下太平・子孫繁榮・武運長久之所、可抽精誠之状如件

建武三年三月十三日

（尊氏）  
「在判」<sup>(21)</sup>

東妙寺長老<sup>(22)</sup>

のように、祈祷の性格を国家的目的として調っている文書もある。しかし概して尊氏の祈祷御教書は、簡略なAタイプのものである。以下、挙兵以降の尊氏の祈祷御教書（明白に尊氏発給が推測され得るものに限る）を編年順に列挙すれば次のようになる。

建武二・12・25

熱田社祠官

〔張州雜志抄〕

9・2	8・9	8・9	8・2	8・2	7・20	7・12	6・25	6・21	6・21	6・21	6・21	5・24	3・29	3・29	3・25	三・3・13
金陸寺正日房	如意輪寺長老	報恩寺 <small>播磨</small>	法藏寺長老	蓮城寺	報恩寺長老 <small>豊後</small>	孝恩寺俗別当	大納言大僧都	桂宮院	金剛三昧院長老	丹生杜別当	金剛峯寺衆徒中	金陸寺長老	高城寺長老	正法寺長老	多田院 <small>摂津</small>	東妙寺長老
〔相州文書〕	〔鰐淵寺文書〕	〔報恩寺記錄〕	〔前田家所藏文書〕	〔大友文書〕	〔原宏平氏所藏文書〕	〔法隆寺 衆分成敗曳付 并諸証文写〕	〔前田家所藏文書〕	〔広隆寺文書〕	〔金剛三昧院文書〕	〔宝簡集 <small>十八</small> 〕	〔宝簡集 <small>十八</small> 〕	〔相州文書〕	〔高城寺文書〕	〔正法寺文書〕	〔多田院文書〕	〔北肥戰誌〕

9・3 清和院長老

〔清和院文書〕

9・12 神護寺

〔神護寺文書〕

9・12 西大寺

〔西大寺文書〕

10・8 鰐淵寺

〔鰐淵寺文書〕

10・14 東寺興善院

〔東寺百合文書〕

11・1 清和院

〔清和院文書〕

11・3 美濃  
長滝寺

〔楓軒文書纂〕

このように、尊氏の祈祷御教書は、建武三年十一月を最後とし、管見の範囲では以後は全く見出されない。このことは、羽下氏が明らかにされた、尊氏の感状・軍勢催促状が、あたかも建武三年十一月を境に見出されなくなる事実と軌を一にするものがある。果して直義の文書はどうなっているのだろうか。それを次に検討せねばならない。

## 二、直義発給文書

### (1) 祈祷御教書

直義も、比較的早くから、尊氏と同様の祈祷御教書を発給している。建武三年七月に竹生嶋に宛てられたものは次のようである。

祈祷事、為国土安穩・家門繁昌可致精誠之狀如件

建武三年七月七日

(直義)  
(花押)

竹生嶋衆徒中<sup>(23)</sup>

また同じ頃高野山に出されたものは

大勝(中略)殊所令感悦也、弥可被祈請天下安寧之狀如件

建武三年九月九日

(直義)  
左馬頭「在御判」

金剛三昧院長老<sup>(24)</sup>

以上いずれも「国土安穩」「天下安寧」と国家的目的を調っており、尊氏御教書との差異は認めがたい。このように、入京直後は祈祷に関しては両者とも同様の権限を行使していたとみられるのであるが、同じ祈祷を要請する両者の権限に、微妙な差異が存したとみられることを示唆するのは、八月十八日、北野社に同時に宛てられた次の文書<sup>(25)</sup>である。

A、天満宮本地供養法毎日一座事、以丹波国船井庄得分之内、為彼料足、選器用之僧、為守慶・禅陽両人之沙汰、可令勤行之狀如件

建武參年八月十八日

(尊氏)  
源朝臣「御判」

B、北野天満宮社僧等毎日祈祷可令勤行条々(中略)

右以前条々(中略)抑当社天満宮者(中略)尊氏并左馬頭直義、依被院宣所令誅伐逆惡之奸臣義貞之党類也、就之今度合戦之勝利、偏任天神之擁護(中略)、然間令寄進丹州船井庄所定置毎日勤行之次第也、(中略)仍所



定如件

建武参年八月十八日

左馬頭源朝臣「御判」  
(直義)

このように、尊氏が財源の要脚地を寄進した上で祈祷（勤行）を要請するのに対し、直義の御教書はその勤行のいわば細則を「条々」の形で「定置」という形式になっている。これはとりもなおさず、尊氏の御教書の方が主で、直義の御教書は従、すなわち補助的、補足的性格をもつことを示唆するものではあるまいか。しかし、全ての寺社にこのような形式の御教書が発せられたわけではなく、要するに建武三年十一月までは祈祷に関して「政令二途に出」る状況であつたことは間違いない。ともあれ、直義の祈祷御教書を以下年次順に表示する。

建武三・七・七 竹生嶋衆徒中

〔竹生嶋文書〕

8・18

北野天満宮

〔北野古文書〕

9・9

高野山金剛三昧院長老

〔金剛三昧院文書〕

9・13

新善光寺

〔新善光寺文書〕

11・27

覚園寺

〔覚園寺文書〕

四・4・27

河内  
菅田奥院長老

〔河内古市村西琳寺并菅田古文書〕

4・27

出雲  
神魂社神主

〔秋上文書〕

4・27

出雲  
円通寺長老

〔安国寺文書〕

五・正・19

松尾神主

〔松尾神社文書〕

正・25

西大寺長老

〔西大寺文書〕

3・14	石山寺衆徒中	〔石山寺文書〕
3・14	清水寺執行	〔勢州社家文書〕
5・30	清水寺美作律師	〔勢州社家文書〕
8・15	桂宮院長老	〔広隆寺文書〕
12・23	鶴岡若宮別当僧正	〔相州文書〕
12・23	実相院中納言法印	〔前田家所藏文書〕
曆応二・10・13	西大寺長老	〔西大寺文書〕
三・6・10	東妙寺・妙法寺	〔東妙寺文書〕
四・2・21	神護寺寺僧中	〔神護寺文書〕
閏4・20	慈恩寺長老	〔大慈恩寺文書〕
康永三・10・3	神魂社神主	〔秋上文書〕
貞和元・4・23	東寺供僧中	〔東寺百合文書 <sub>原</sub> 〕
二・8・2	能登永光寺住持	〔中興雜記〕
三・5・19	和泉松尾寺寺僧中	〔松尾寺文書〕
8・29	東寺供僧中	〔東寺文書 <sub>五常</sub> 〕
9・15	桂宮院長老	〔広隆寺文書〕
9・15	恩徳院長老	〔大通寺文書〕

12・20	願 地藏院房玄
12・25	長門 二宮大宮司
12・26	東寺供僧中
12・26	神護寺寺僧中
12・27	長門 神護寺衆徒中
四・正・14	長門 一宮大宮司
正・23	阿蘇 大宮司
4・22	金剛峯寺衆徒中
6・1	神護寺寺僧中
6・1	清水寺寺僧中
6・12	長門 二宮大宮司
8・1	松尾社神主
8・1	恩徳院長老
8・1	桂宮院長老
9・2	東寺寺僧中
	〔前田家所藏文書〕
	〔正閏史料〕
	〔東寺文書 <small>千手文書</small> 〕
	〔神護寺文書〕
	〔神護寺文書〕
	〔正閏史料〕
	〔阿蘇文書〕
	〔高野山文書〕
	〔神護寺文書〕
	〔勢州社家文書〕
	〔忌宮神社文書〕
	〔松尾社祝東家文書〕
	〔大通寺文書〕
	〔広隆寺文書〕
	〔東寺文書 <small>六基</small> 〕

このように、建武四年に入ると、祈祷御教書の発給は直義だけとなり、尊氏は寺社の祈祷に一切関与をしなくなる。

貞和三年（一三四八）夏以降、南朝方の蠢動が目立つてくると、戦勝を祈願する禳敵祈祷の御教書が多く出されるが、その形式は

南方凶徒退治事、近日殊可被致祈祷精誠之状如件

貞和三年八月廿九日

直義（花押）

東寺供僧御中<sup>(26)</sup>

のように、すべて直義の直状である。このように、尊氏はいったん直義に割譲した祈祷御教書の発給権を、観応の擾乱が勃発するまで取り戻さなかったことが知られるのである。

## (2) その他

寄進・祈祷以外に、直義が寺社に発した御教書は、次に示すような寺格指定の文書がある。

信濃国開善寺、可為諸山列之状如件

暦応元年七月十七日

左兵衛督御判

謹上 清拙和尚<sup>(27)</sup>

数少ない事例を検するに、概ねこの種の御教書は直義の権限だったように推測されるが、例えば同年十一月、日向大慈寺を祈願所に指定した御教書<sup>(28)</sup>は尊氏が発給する等、明らかな例外が存する。また寺務・社務職の安堵も、尊氏・直義こどもも発給しており<sup>(29)</sup>、さきの寄進・祈祷の如き両者による明白な管轄区分の推測は困難である。ともあれ、この種の御教書の概要を編年表示しておく。

	建武四・7・24	<small>伊豆</small> 密厳院別当職安堵	(尊氏)	〔三寶院文書〕
	10・12	<small>信濃</small> 宝戒寺住持職安堵	(直義)	〔相州文書〕
	五・7・17	<small>信濃</small> 開善寺ヲ諸山ニ列ス	(直義)	〔蔭涼軒日録〕
	曆応元・8・11	<small>六条</small> 八幡宮別当職安堵	(尊氏)	〔三寶院文書〕
	11・16	<small>日向</small> 大慈寺ヲ祈願所ニ定ム	(尊氏)	〔西行雜録〕
	二・2・25	<small>備後</small> 金剛三昧院寺務職安堵	(直義)	〔高野山文書〕
	三・11・1	<small>備後</small> 浄土寺ニ仏舍利奉納	(直義)	〔浄土寺文書〕
	五・11・23	<small>長門</small> 二宮社造営	(直義)	〔忌宮神社文書〕
	康永元・7・13	<small>備前</small> 光明寺ヲ祈願所ニ定ム	(直義)	〔秋元興朝氏所蔵文書〕
	二・11・29	<small>筑前</small> 宗像社造営	(直義)	〔宗像文書〕
	三・7・30	<small>六条</small> 新八幡社務職安堵	(尊氏)	〔三寶院文書〕
	三・7・30	<small>六条</small> 新八幡社務職安堵	(直義)	〔三寶院文書〕
	貞和元・11・19	<small>伊豆</small> 修善寺塔ヲ利生塔ト称セシム	(直義)	〔神田宏平氏所蔵文書〕
	二・6・6	<small>伊賀</small> 平等寺ヲ安国寺ト定ム	(直義)	〔三國地志〕
	三・4・19	<small>金沢</small> 称名寺住持職讓与安堵	(直義)	〔賜芦文庫文書〕
	12・21	二位右大臣家法華堂別当職安堵	(直義)	〔三寶院文書〕

## むすびにかえて

以上の考察から得られた結論を以下に述べる。まず尊氏は、建武二年十一月の拳兵直後から、寺社に対して祈祷御教書を発し、寺社の武力装置である「大衆・衆徒」に対しても軍勢催促状や感状を発していた。これは直義も同様の権限を保持していたのであるが、これら寺社の戦争参加への反対給付ともいふべき寺社領の返還・給付（新寄進）のみは尊氏一人が行い、直義はこの建武没収地の配分行為には一切関与していなかったのである。このことは、やはり拳兵以来、守護職の補任と新恩の宛行のみは尊氏単独で行い、直義にその権限がなかった事実と対応するものといえよう。このように、武将・武士に対する兄弟の権限行使のあり方と、僧侶・神官・大衆に対するそれとがパラレルに対応しているということは、室町幕府が寺社勢力を武家に準ずるものと認識していたことの一証左であると思われる。すなわち、高僧・寺僧らの祈祷従事も、幕府にとっては武士の戦闘参加と同レベルの行為と見做されていたものと推測しうるのである。

次に、建武三年十一月三日、『建武式目』が制定され幕府が名実ともに発足した直後、尊氏は祈祷御教書を発給しなくなり、寺社に祈祷を要請するのは直義だけとなる。このような変化は、羽下徳彦氏により明らかにされたところの、軍事指揮権・戦功認定権を尊氏が直義に譲つたという事実に対応する。軍事奉公と神仏への祈祷という、一見全く相異なる行為を要求する権限が、いずれも直義一身に具有されていたということは、これ又、幕府が、祈祷をば戦闘に準ずる行為と見做していたことにつながろう。

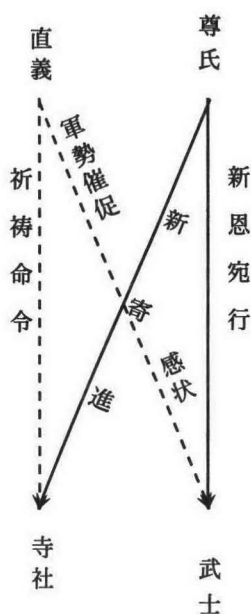
次に、本稿で明らかにし得た事象を、佐藤進一氏・羽下徳彦氏の明らかにされた事実と総括して眺めてみたい。

建武三年十一月以降の両者の権限を今一度整理すると<sup>(30)</sup>次のようになる。

尊氏……守護職補任・新恩宛行

+ (新寄進)

直義……裁許・安堵・過所・禁制・軍事指揮・戦功認定+ (祈祷命令)



このように、尊氏の権限は守護職補任を除けば建武没収地(欠所地)をどう配分するかという土地給与の問題に尽きるものである<sup>(31)</sup>。これに対し、直義の権限は、佐藤氏が概念化された“領域的”支配権に加え、武士・僧侶(神官)に広汎な奉公を要求するものであつて、一見、「尊氏的全権限を代行」するに至つたようにも理解できる。

しかしながら、封建制の本質は「土地の分封」にあるというオーソドックスな考え方<sup>(32)</sup>に立つならば、分封の権限(軍司令官の配置、欠所地の配分)を一身に担う尊氏の権力は封建制の根幹にかかわるものと言ふべきであり、裁判・行政・軍事指揮等の権限を担う直義の権力は、封建制上、行政的・補助的なものと言わざるを得ない。上島有氏は、文書の形態論的な考察から、「直義は(中略)尊氏より一段下」「幕府の最高権力者の地位にあつたのは兄尊

氏」と結論されたが<sup>(3)</sup>、筆者の如上の考察も結果的にはそれに近いものとなった。別の言い方をすれば、尊氏の権限は君主的、国王的権限であり、大権の称にふさわしく、直義の権限は宰相的権限の色彩が強い、ということになるうか。幕府政治を全体としてみれば、尊氏が主、直義が従、という印象はぬぐえないのである。

### 〔補註〕

- (1) 田中義成著『南北朝時代史』一九二五年刊、戦後、講談社学術文庫で再刊。
- (2) 佐藤進一氏「室町幕府開創期の官制体系」（佐藤進一・石母田正共編『中世の法と国家』東大出版会、一九六〇年刊）、同氏「室町幕府論」（岩波講座旧版『日本歴史中世3』）
- (3) 同書の暦応二年六月、安国寺利生塔建立の条に、「此故に御政道の事を將軍より御讓有しに、固く御辞退再三にをよふといへとも、上御所御懇望有し程に御領状有、其後ハ政務の事においては一塵も將軍より御入口の義なし」とある。

(4) 羽下徳彦氏「足利直義の立場——その一 軍勢催促状と感状を通じて」（『古文書研究』六号）。なお近年同氏は「足利直義の立場——その三 足利直義・私論」（同氏編『中世の政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年刊）を發表され、旧説を補強されたが、さらに一步を進めて、尊氏の守護補任権を根拠に「彼の権限を主從制的支配権に限定するのは妥当ではない」、「鎌倉殿の後継者として統治権の中核は握っている」と注目すべき指摘をされている。また、尊氏直義両者発給文書の原本調査（紙質、形状）の成果をもとに上島有氏が、「室町幕府開創期の権力



のあり方について」(『古文書研究』11号)を発表されている。

- (5) この返還令のことは佐藤氏(同氏著『南北朝の動乱』中公文庫)、上島氏(同氏前掲論文)の言及がある。多少重複をいとわず、以下に略述する。

(6) 『武雄社文書』

(7) 『小早川什書』

(8) 『士林証文』

(9) 『広隆寺文書』

- (10) この事実、上島有氏がつとに指摘されている(同氏前掲論文)。氏は、『院宣施行状の発給(所領安堵権)が尊氏から直義に移るのと平行して、尊氏の『元弘没収地返付令』の下付も行われなくなった』と述べられている。

(11) 『含英集拔萃』

(12) 相田二郎著『日本の古文書』上、P八四六～八五九(岩波書店刊、一九四九年)

- (13) 寺社大衆(いわゆる僧兵)への軍勢催促状は、初期には尊氏自署で発給している。

例えば、

新田義貞已下凶徒等誅伐事、所被成院宣也、早馳参御方、可致合力状如件

建武三年七月五日

(尊氏)  
(花押)

高野山衆徒中(『宝簡集』十三)

なお同日付で根来寺衆徒中へ(『三宝院文書』)、また七月廿六日付で三島社祝宛に直義署判の催促状が発給されて

いる。

(14) 『東寺文書』 五常

(15) 同年七月一日付の、山城久世上下庄を東寺鎮守八幡宮に施入した寄進状（『東寺百合文書』イ）では、より直截に「天下泰平・国家安寧」と記されている。

(16) 『東大寺藏書文』

(17) 『高野山文書』 金剛三昧院

(18) 『北条寺文書』

(19) 『東寺百合文書』せ、観応元年七月廿八日付尊氏御教書の押紙に「等持院殿御祈祷御教書」とある。富田正弘氏「中世東寺の祈祷文書について」（『古文書研究』11号）

(20) 『張州雜志抄』熱田祠官田島氏藏、従つて宛所は熱田社の神官か社僧であろう。

(21) 端書に「尊氏朝臣ノ御書ニ云」とあることから、一応尊氏の署判と推定される。

(22) 『北肥戦誌』

(23) 『竹生嶋文書』

(24) 『高野山文書』 金剛三昧院

(25) 黒板勝美氏所藏『北野古文書』

(26) 『東寺文書』

(27) 『蔭涼軒日録』 文明十七年九月十五日条

(28) 『西行雜錄』 曆応元年十一月十六日付尊氏御教書

(29) 康永三年七月卅日に、三宝院賢俊に六条新八幡宮社務職を安堵したさい、尊氏・直義とも全く同文の自筆安堵状(書状)を發給している(『三宝院文書』)。この同日付の兄弟の安堵状については、原本を精査された上島有氏の研究があり、両状とも尊氏自筆と推測されている(同氏前掲論文)。これによって判断すれば、寺務・社務の安堵に関しては、立前上、両者全く同等の権限を保持していたものと推測される。

(30) この結論部分については、ごく簡単に拙稿「一四〇一五世紀の日本——南北朝と室町幕府」(岩波講座『日本通史』巻九、一九九四年十月刊)に於て紹介したが、論証を全く省略した見通しのなものとどめたため、今回本稿に於て論文の形で披露し、大方の御高評を仰ぐ次第である。

(31) 本稿の課題追求のため、尊氏・直義兄弟の發給文書を通観した結果、欠所地の配分は武家・寺社領に限られ、公家領には及んでいないことがはからずも判明した。従つて幕府は公家領の配分については院権力(光厳上皇の聖断)にこれを委ねていたわけである。もつとも、長講堂領・法金剛院領・室町女院領等、天皇家領の管領について、尊氏の内奏文書(『京都御所東山御文庫記録』八月三日付尊氏書状案、『大日本史料』六一三所引)が残つており、実質的な幕府関与は否めないが、形式的な公家領の配分は次代に持越されたわけである。

(32) 内田銀藏著『近世の日本』、上横手雅敬氏「封建制概念の形成」(『牧健二博士米寿記念法制史論集』思文閣出版、一九八〇年十一月)

(33) 上島氏前掲論文